

日本文学再発見シリーズ2

「万葉集あれこれ」

群馬県立女子大学 北川 和 秀

◎天武天皇にまつわる歌

天皇、吉野の宮に幸しし時の御製歌

- ①よき人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よよき人よく見（一・二七）  
（淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉見与 良人四来三）  
紀に曰はく、八年己卯の五月庚辰の朔の甲申、吉野の宮に幸すといへり。

天皇、藤原夫人に賜ふ御歌一首

- ②わが里に大雪降り大原の古りにし里に落らまくは後（二・一〇三）

藤原夫人、和へ奉る歌一首

- ③わが岡の霰に言ひて落らしめし雪の摧けし其処に散りけむ（二〇四）

天皇、蒲生野に遊獵したまふ時、額田王の作る歌

- ④あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る（一・二〇）

皇太子の答へましし御歌 明日香宮に天の下知らしめしし天皇、諡して天武天皇といふ

- ⑤紫草のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも（二二）

紀に曰はく、天皇七年丁卯、夏五月五日、蒲生野に從獵したまふ。時に大皇弟・諸王・内臣と群臣、悉皆に從そといへり。

◎万葉集の歌あれこれ

【恋の歌】

- ①我はもや安見兒得たり皆人の得かてにすといふ安見兒得たり（二・九五）藤原鎌足

- ②うつせみの常の言葉と思へども継ぎてし聞けば心はまとふ（一二・二九六一）

作者不明

- ③一昨日も昨日も今日も見つれども明日さへ見まく欲しき君かも（六・一〇一四）

橘文成

- ④相見ては幾日も経ぬをここだくも狂ひに狂ひ思ほゆるかも（四・七五一）大伴家持

- ⑤夕闇は路たづたづし月待ちて行かせわが背子その間にも見む（四・七〇九）

豊前国の娘子大宅女

⑥ 八百日行く浜の沙もわが恋にあに益らじか沖つ島守（四・五九六）笠女郎  
⑦ 梅の花降り覆ふ雪を包み持ち君に見せむと取れば消につつ（一〇・一八三三）

作者不明

⑧ わが背子と二人見ませば幾許かこの降る雪の嬉しからまし（八・一六五八）光明皇后  
⑨ 信濃なる筑摩の川の細石も君し踏みてば玉と拾はむ（一四・三四〇〇）信濃東歌  
⑩ 朝寝髪われは梳らじ愛しき君が手枕触れてしものを（一一・二五七八）作者不明  
⑪ 君なくは何そ身装はむ匣なる黄楊の小櫛も取らむとも思はず（九・一七七七）

播磨娘子

⑫ 春雨に衣はいたく通らめや七日し降らば七日来じとや（一〇・一九一七）作者不明  
⑬ 草枕旅行く君を人目多み袖振らずしてあまた悔しも（一二・三一八四）作者不明  
⑭ つぎねふ 山背道を 他夫の 馬より行くに 己夫し 歩より行けば 見るごとに  
哭のみし泣かゆ 其思ふに 心し痛し たらちねの 母が形見と わが持てる  
真澄鏡に 蜻蛉領巾 負ひ並め持ちて 馬買へわが背（一三・三三一四）作者不明  
⑮ 真澄鏡持てれどわれは駢なし君が歩行よりなづみ行く見れば（三三・一六）  
⑯ 馬買はば妹歩行ならむよしゑやし石は履むとも吾は二人行かむ（三三・一七）

### 【挽歌】

① 天の原振り放け見れば大君の御寿は長く天足らしたり（二・一四七）倭太后  
② 福のいかなる人か黒髪の白くなるまで妹が声を聞く（七・一四一一）作者不明

### 【旅の歌】

① 旅人の宿りせむ野に霜降らばわが子羽ぐくめ天の鶴群（九・一七九一）遣唐使の母  
② 君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ（一五・三五八〇）  
遣新羅使人の縁者

③ 唐衣裾に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして（四四〇一）信濃防人  
④ ちはやぶる神の御坂に幣奉り斎ふ命は母父が為（四四〇二）信濃防人  
⑤ 難波道を行きて来までと吾妹子が着けし紐が緒絶えにけるかも（四四〇四）上野防人

### 【その他】

① 天の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ（七・一〇六八）柿本人麻呂歌集  
② 春の野にすみれ採みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける（八・一四二四）

山部赤人

③ 物皆は新しき良しただしくも人は旧きし宜しかるべし（一〇・一八八五）作者不明  
④ 朝床に聞けば遙けし射水川朝漕ぎしつ歌ふ船人（一九・四一五〇）大伴家持  
⑤ いさなとり海や死にする山や死にする 死ぬれこそ海は潮干て山は枯れすれ

（一六・三八五二）作者不明